

神のやま

第6号

能くま有りてしるふらふら



播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会



はじめに 一ツ山大祭・三ツ山大祭における造り物

二〇一三年（平成二十五年）に開催された第二十二回三ツ山大祭（臨時祭）において、祭礼は境内やその周辺が中心でしたが、城下町全体としても賑わいがありました。中でも祭礼の開催前から多くの人が関わり、話題となった事や、期間中に展示された造り物も、町の賑わいの一端を担っていました。特に一九五三年（昭和二十八年）より途絶えていた、町衆による造作が六十年ぶりの復興ということもあり、関わった人たちの喜びもひとしおでした。

造り物の成立当初から、見る人を楽しませる壮大な仕掛けは、一ツ山大祭・三ツ山大祭に関する古文書や絵巻、新聞や写真にも記載されており、遠方から多くの見物人を呼び寄せ、侍が作り物を見たいがため解体を遅らせる依頼を出すほどに、人々の心を掴んでいた造り物とはどんなものだったのでしょうか。

総社の造り物の展開は、①発生から江戸時代前期までの町々に定着する時期、②江戸中期から昭和初期の各町が競い合い独自色が展開された時期、③戦後、高度経済成長からそれ以後に大きく分かれます。

一 造り物の成立と周囲の状況

先に総社の造り物にも手本があり、それらがどう発祥し展開されたのか触れておきます。

まず、造り物が世に出てくる前の段階として、お盆に飾る灯籠が大きく関わっていました。

室町初期の公家社会において、お盆に技巧を凝らした灯籠を譲渡する風習が盛んに行われていたようです。一四二三年（応永三十年）伏見宮貞成親王の看聞御記に、位の高い人たちの間で送られた細工灯籠が町家の座敷や街路などで公開され、灯籠を見物に出かけることが庶民の間に広まっていた様子が記されています。

灯籠には光と影とで表現する影絵と、造形を飾るものと大きく二つありました。造り物は灯籠から独立した形で展開されたようです。一八五〇年（嘉永三年）の曾根崎新地灯籠会の記録では「灯籠は絹張にして、細工美麗に手をつくし、大物などは頭人形にして、衣服は画絹を以てもとより、其中に火をともし、其きれいであること計なし。」とあり、造り物の材質を軽くし、大衆の集まる見せ物として高所で展示するものが作られています。

これらは職人の手により制作されたと推測されますが、身の回りにあつた素材、例えば乾物や干物、かご、わらや普段使いの道具、農具、嫁入り道具や、仏事の道具などで作られる、一式形式と言われるものもありました。本来とは違う別の物に見立て、タイトルなどで「こうですよ」と見せると、そう見えてしまうこともあり、作る側も造作の趣向を楽しみ、見物人は見立ての文化を楽しんだようです。

一式形式は誰でも作りやすいことから、一般にも普及していました。一七八七年（天明七年）に「作物趣向種」という造り物の制作ガイド本が出版されています。天保八年・安政七年・万延元年と江戸時代に計四回増刷。近代になっても改版出版されるほど需要があったようです。

これらの造作技術が播磨に伝わり、町衆による一ツ山大祭・三ツ山大祭の賑わいを盛り立てていきました。

二 総社の造り物の発生から定着

総社の祭礼で山が作られ始めたのは、一五二二年（大永元年）からで、「装山ノ造車」を宝前に捧げたとあり（播磨国飾東郡国衙庄惣社略記）、いわゆる装飾された曳山でした。山は翌一五二二年（大永二年）に臨時祭で形式が改められ高さ三間二尺の山に色絹を巻いたものを作らせたこと、一五七六年（天正四年）の『惣社集日記』に記されており、曳山から置山にされたが、山自体の造りは盛大でした。一七三三年（享保十八年）の臨時祭を描いた絵図には山から台が迫り出し飾り人形が据えられています。（図一）

しかし、この臨時祭以後は享保の改革で儉約令が厳しくなり、造り物の付いた山は作られなくなり、山も覆う絹が木綿に変更されたり、高さもどんどん低くなっていきました。これと入れ替わるように町中の造り物と曳き物が登場します。（図二）

一七四四年（延享元年）、総社の夏祭を松平明矩が始めさせており、夏祭の見世物として取り入れられました。造り物が記録に出てくるの



図1 臨時大祭礼絵図 享保18年(1733)英賀神社蔵



図2 播州姫路総社臨時大祭礼曳物略図 嘉永7年(1854)前川憲司氏蔵

は一七五一年（宝暦元年）の夏祭で、総社の社僧であった明王院境内に「三河国八つ橋 杜若」を元塩町が出したと、一七五二年（宝暦二年）の記録にあります。杜若は袱紗や茶せんなど茶道具で作り、波は扇子を使って表現した一式形式でした。一七五四年（宝暦四年）「箆の梅」が制作された事で、それまでの風景中心から物語や芝居の一場面が題材として作られていきました。造り物が、各町においても造るようになったのは、一七五九年（宝暦九年）の正遷宮で、十四町が造り、このうち設置型は、本町、元塩町、坂田町で、他の町は二層四輪曳形色の屋台に作り物を乗せていたと記されています。

三 各町が競い合う造り物最盛期

各町で作られ始めると、他に引けを取らない演出や趣向を凝らす様になってきました。一七九三年（寛政五年）『臨時祭礼見聞録』の記事に「町々作り物目録」とあり、「作り物之儀ハ 此度の祭礼より相始り候事也 但し屋根二致シ候が初メ力定かならず」という注記があり、屋根にも作られていき、造り物の出た十六町のうち綿町、米田町、龍野町一丁目、二丁目が屋根の上に造っていました。屋根に設置されたもの以外も総じて大型のものが造られており、地上に門や山門など楼門や城櫓の造り物を建てたり、向かいの家の屋根から屋根へ橋を渡し造作するなど、近代まで盛ん

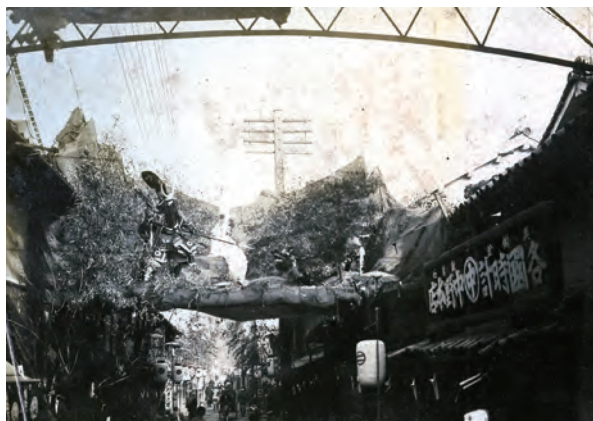


写真1 往来を渡して作られた造り物「加藤清正虎退治」(光源寺前町) 1928年(昭和3年) 木村政勝氏アルバム

に登場する演出も登場しています。

一八二五年（文政八年）福中町の「鯨取」（図3）は壮大で、鯨は黒い木綿で包み、白木綿の汐を吹いているのですが、「鯨取りくじら大キサ三十尋」、「塩ふき高サ八間船三十双大キサ七間ツツ人形七十人一丁中屋根は惣海也浪ハ木綿也 此作り物 木綿数三千五百反」と「幾蔵図冊」に記録されている事から、クジラの大きさを約六〇メートル、汐吹の高さ一四から一五メートル、海に見立てて町の屋根に木綿を引き詰めてしまうという、壮大な鯨取りの情景を作りました。



図3 幾蔵図冊より「鯨取」
姫路市立城内図書館蔵

龍野町はもともとの地形や建物を利用したり、東西に約一キロにわたる長い町筋で凝った演出をしました。一八三三年（天保四年）には、屋根に平清盛が夕日を招く図をこしらえ、石薬師の山頂に太陽の差し渡し五間、光の筋の長さ五間の夕日を作っています。

ほかの町も負けてはおらず力を入れており、歌舞伎や落語、古今東西の様々な題材を扱い、疑似体験させる仕掛けを作りこんでおり、来る人を楽しませることに情熱をかけていました。

これだけ熱を入れて作られたものを見たいのは侍も一緒で、一八五四年（嘉永七年）の記録には家老をはじめ、御役人は祭礼期間中、造り物の見物はできないので、解体を一日延ばして残しておくよ



写真2 大屋根の上の造り物
「龍虎の争い」（本町）1928年（昭和3年）木村政勝氏アルバム

うに指示が出されています。

次第に町ごとにその出来栄を競うようになると、遠方より人形師を招くというようになり、一九二二年（大正十一年）の新聞によれば、三十二町の造り物のうち、十五町が外部から招いた職人によって作られました。

人形師の造形技術の導入もありますが、一九〇九年（明治四十二年）から一九一一年（明治四十四年）に姫路で水力発電事業が開始した事で、一九一三年（大正二年）の三ツ山大祭では早速取り入れられ、電気仕掛けのカラクリ造り物が登場。ライトアップや町中がアーク灯で電飾されました。一九五三年（昭和二十八年）の三ツ山大祭では人形が動く仕掛け、目が光る大蛇、口を開くたびに煙を吐くガマなどの電気機械や、拡声器を使って擬音を出したり、テープレコーダーによって説明が流れるものなど時代の最新技術も導入されました。

姫路周辺の交通事情も大きく変わり、一八八八年（明治二十一年）山陽鉄道の姫路駅設置。一八九四年（明治二十七年）播但鉄道開通。一九〇九年（明治四十二年）に播電鉄道が開通し、遠方からの見物客が押し寄せました。一九三四年（昭和九年）に廃線になってしまった播電鉄道ですが、一ツ山大祭の開催された一九二八年（昭和三年）には一〇七万人が利用している事から大祭の影響であった事は想像に難

くないです。当時の日本の人口は約六二〇七万人であり、地方の鉄道としてはかなりの利用率の高い年になっています。

交通の利便性が良くなり、多くの見物人が町ごとの造り物を見に押し寄せていましたが、個人でも造り物で迎え入れていました。一九二八年（昭和三年）の一ツ山大祭見物に出かけた大阪から来た人が「普通の家にも表庭の往来より見える所に人形や動物の造り物をして、通る人に見せたり、裏木戸をあけて庭先の造り物をみせたり、或る家では表玄関の庭木に綿をきせ 雪中にきかせたものもあった。」と記録に残っています。

これは町ごとの造り物とは別に、何でもない個人が一式形式で遠方からの見物客を迎える趣向も残っていたことを伝えていきます。

四 衰退と復興

日本は太平洋戦争で敗戦しましたが、一九五三年（昭和二十八年）の三ツ山大祭は開催されました。造り物はすべてが人形師や興行師の手によるものとなりましたが、戦後復興の熱気もあり町全体を使い盛大に造られました。その後日本は高度経済成長期に入り、社会構造の変化もあり、造り物に町衆が関わらなくなっていく、祭礼の造り物は企業協賛でいくつか作る程度になっていきましたが、二〇一三年（平成二十五年）の三ツ山大祭において衰退していた造り物を復活しようと総社（第二十二回三ツ山大祭実行委員会）が呼びかけ、六十年ぶりに八団体が参加、十名の造り物が復興されました。公式ガイドブックには造り物を巡るスタンプリーも掲載されており、総社だけでなく市内を散策する動機づけにもなり町の賑わいに貢献しました。

制作にあつては、造り物を見たことも作ったこともない人々が集まって、ゼロからの取り組みでしたが、制作後には作ることへの意欲を持たれた方も少なからずおられ、その熱意が、播磨国総社一ツ山大



写真3 2013年（平成25年）造り物「秀吉・官兵衛の中国大返し」の背景画の色塗り作業を行う東光中学校美術部



写真4 2013年（平成25年）造り物「弁慶、書寫山圓教寺を焼く」、大祭後の活用として圓教寺新緑祭りで展示

祭・三ツ山大祭保存会の設立となり、「謡囃子」の復活に向けての取り組みや、造り物学習会が始められました。ここでは、平成二十五年の造り物制作の経験を踏まえ、住民参加で取り組み、盛り上がりを見せています。

おわりに これからの造り物

造り物は、山と共に成立し、祭が地域に根差し、それぞれのコミュニティどうしの関わりがあった事で造り物文化が発展しました。

保存会の活動は、次回の二〇三三年の三ツ山大祭に向けて進んでいます。課題も多く残っています。それらの課題は、既に進められている造り物学習会の住民参加に加え、他世代や地域との交流で造り物制作に向けた取り組みを持つことが解消の糸口となり、三ツ山大祭の発展につながっていくのではないのでしょうか。



カラーでみる三ツ山大祭(昭和二十八年)

河本純男氏旧蔵



戦災から復興された本殿



神門前に並ぶ三ツ山と行き交う参詣の人々



三ツ山大祭の宣伝のため、駅前に出現した大鳥居



馬に乗って街を練る石見市長



御幸通りに掛かる五条橋



加藤清正虎退治の場(駅前町)の造り物と眺める人々



元禄花見踊(福中町)の造り物



巴御前駒止の場(東呉服町)の造り物



那須の与一（御幸通）の造り物



二階町通り入口に設置された「娘道成寺」
（中二階町）の造り物



勸進帳 安宅之関の場（西二階町）の造り物



川中島合戦（直養町）



龍虎（博労町）の造り物



小溝小路商店街の造り物「羅生門」、
鬼と武者人形が見どころ（博労町）



羽衣（元塩町）の造り物



忠臣蔵、清水一角奮戦之場（米田町）

令和三年度 保存会活動報告

令和三年度役員会並びに 特別講演会「三ツ山大祭 まつりと造り物」

(令和三年七月二十二日)

令和三年度の役員会に合わせ、特別講演会を開催しました。役員会は、役員十九名の出席、三十四名の委任状により開会しました。

田中会長より、開会の挨拶と合わせて、コロナ禍でも役員会を無事開催できた事への御礼がありました。

また、ご公務のお忙しい中、姫路市長 清元秀泰様(当会名誉顧問)、姫路市議会議長 萩原唯典様(当会顧問)にご出席いただき、挨拶を頂戴しました。

続いて議案の審議に入り、各号議案とも一同異議無く承認されました。

引き続き、防疫対策とソーシャルディスタンスを確保して特別講演会を開催しました。

講師に、えかき・ものづくり作家・京都精華大学 非常勤講師 ドウノヨシノブ氏をお迎えし、「三ツ山大祭まつりと造り物」の講演をいただきました。



り物に変化していく様子の理解が深まりました。

また、前回の第二十二回三ツ山大祭において、学術委員として造り物製作に携われたお話をいただきました。

造り物について、大変興味深いお話をいただき、聴講された五十名余の方々は、真剣に聴き入っていました。

曳き物づくり学習会(令和三年八月三日～九月二十八日)

今年度のメイン事業となる曳き物づくり学習会を、令和三年八月から九月にかけて、十回に亘り実施しました。

播磨国総社図絵(天保年間 西尾市岩瀬文庫蔵)には、三ツ山大祭に際してきらびやかな曳き物が登場します。



令和元年に復興した「謡囃子」。その行列に新たな曳き物を出したい。その思いをから、曳き物にふさわしいモチーフを昨年度から検討し、人より大きく描かれた天狗の面の曳き物の絵を見つければ、この迫力を再現しようと決まりました。

制作にあたり、えかきものづくり作家 ドウノヨシノブ氏にご指導いただきました。絵図から、解体できる曳き物の構造・素材・製作手順などを考案していただき、学習会を進めました。

天狗の面は、縦一、五メートル、横一、二メートル、鼻の長さは七十五センチという大きさです。総社にある猿田彦の面を3Dスキャナーで読み込み、発泡スチロールを削り出したものに、紙粘土を貼り、赤の塗料やニスなどを塗ります。紙粘土や塗料を何度も塗り重ね、重厚感のある天狗の面となりました。

本年は、これまでの保存会の活動の成果を紹介するために「造りもの展」という展示会を開催しました。

今年度制作した天狗の曳き物をはじめ、過去に学習会で制作した三ツ山の曳き物や鎧、大傘に謡囃子の様子を紹介した写真パネルも展示しました。

天狗の迫力が話題を呼び、各メディアに取り上げられたこともあり、大変多くの方にご来場いただきました。



造りもの展

(令和三年十月一日～十月三十日)

木材や紙を使って、紅白の御幣、面を乗せる台車、欄干を作り、台車を覆う波模様の布も丁寧な制作しました。

学習日最終回に完成セレモニーを行い、田中会長、名誉顧問の清元姫路市長による天狗の目入れが行われ完成しました。

小袖山に飾る小袖の陰干し

(令和三年十月六日)



毎年恒例となりました小袖の陰干しを、十月六日に総社境内にて行いました。

三ツ山大祭の小袖山に飾る小袖を、田中会長をはじめ、オブザーバーの先生、会員の方々約三十名のご奉仕をいただきました。

色とりどりの小袖が境内に並べられ、約二〇〇領の陰干しが出来ました。

小袖山には約八五〇領の小袖が必要となります。

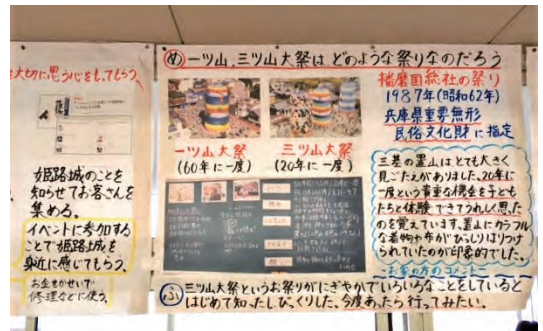
令和十五年の三ツ山大祭に向けて、皆様からのご寄進をお待ち申し上げております。

姫路市立白鷺小中学校 取り上げられました

社会科学習に保存会活動が

(令和三年十二月八日)

姫路市で初の義務教育学校として、平成三十年四月に開校した、姫路市立白鷺小中学校。社会科学習において、姫路のまちなに残っている建物や祭りなどは、どのように受け継がれてきたのかをテーマに、当保存会の活動について学習が行われました。



今回、社会科学習に取り組んだのは、第四学年三組の児童さんたち。保存会からは稲岡事務局長がアドバイザーとして参加しました。

郷土の祭りとして、一ツ山大祭・三ツ山大祭がどのように行われてきたのか。そして、保存会が出来た目的や、両大祭を守り受け継ぐ人々の取り組みについて学びました。

まために、保存会が国の重要無形民俗文化財を目指す意味や、活動の意義をそれぞれが考えました。

次世代を担う子供たちが、郷土の祭りを学び考える素晴らしい授業であったと感慨もひとしおでした。

総社境内長生殿での謡囃子

(令和四年一月十六日)

昨年に引き続きコロナ禍のため、宝恵駕籠行列が中止になったことから、四回目となる本年も、総社境内での謡囃子特別上演となりました。

三ツ山踊り保存会、姫路・城東連、置塩城鎧工房、香寺太鼓の四団体の上演からなるステージを計四回披露しました。天狗の曳き物を舞台に設置し、迫力あるステージを演出しました。

ステージが始まる前から、多くの方が舞台を取り囲んでいました。香寺太鼓の力強い演奏でオープニングを飾った後、田中会長、名誉顧問の清元姫路市長にご挨拶いただきました。



置塩城鎧工房は鎧姿で会場を練り歩き、ステージでは参拝者のみなさんと勝ちどきをあげました。
三ツ山踊り保存会と姫路・城東連はにぎやかに踊りを披露し、参拝者の方も一緒になって踊る回もあり、大いに盛り上がりました。

最後になりましたが、本年もこのような時代（世情）に上演することが出来たのは、関係各位のご協力によるものと、心より感謝申し上げます。
ぜひ来年は城下へ繰り出し、大傘や曳き物が揃いパワーアップした謡囃子を披露したいものです。

令和四年度 保存会事業予定

- 一、調査・研究事業
会報誌第七号発行
- 二、研修会・講演会事業
記念講演会
「にわか」衣装製作学習会の実施
- 三、会議
役員会
- 四、その他関連事業行事等
小袖の陰干し
造りもの展
にわかと謡囃子の実施

「悠久の歴史を伝える 播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭」好評頒布中!

一ツ山大祭・三ツ山大祭の
すべてがわかるこの一冊！
一冊三〇〇円
播磨国総社にて



安永三年己卯...

番組

四天王のとりり具名簿

西山

橋立神
大江山
橋立堂

中山

竹生傳
くも天狗
源平七か

東山

紅毛
大佛道長
弟のつとめ

祀り物

久保人花車両山村

組屋所菊上と中山村

山里と藤東山へま

右のまは茂乃申さるるも

うら有る事一方宿せら

よりまはれ目物色



発行 令和4年3月31日
 発行所 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会
 姫路市総社本町190播磨国総社射楯兵主神社内
 ☎ 079-224-1111 fax 079-224-1114
 E-mail hozonkai@sohsha.jp HP http://sohsha.jp